

文学の機能

ウンベルト・エーコ／和田忠彦

言い伝えによれば、それがほんとうでないとするればよく見つけてきたものだが、一度スターリンがローマ教皇傘下の軍事師団はいくつあるのかと訊ねたことがあったそうだ。その後数十年間の出来事が教えてくれたのは、師団数というものは、ある状況下ではたしかに大切なものだが、それがすべてではないということだ。重さではかれない非物質的な力というものがあって、ともかくものしかかってくるということだ。

そうした非物質的な力には取り囲まれているのだが、それは、いわゆる宗教的教義にも似たさまざまな精神的価値とよばれるものばかりではない。堅固な根をもち、何世紀にもわたって生き延びているスターリンの政令から教皇の通達にいたるまでの厳格な法の力もまた、非物質的な力のひとつなのだ。そうした力のなかに、わたしは、文学的伝統の力を加えたい。つまり人類が実践的目的（戸籍簿保存、法解釈や学問方法の注解、会議記録、鉄道時刻表の手配）のためでなく、もっぱら自己愛のために無償で、過去から現在にいたるまで産みだしつづけているテキストの総体がそなえている力である。ひとはテキストを、気晴らしのためであったり、精神を高揚させるためだったり、知識をひろめるためだったり、あるいはたんなる暇つぶしとして読むわけだが、それは（学校での義務を別にすれば）誰に強制されて読むわ

けでもない。

たしかにモノとしての文学が非物質的であるといっても、通常、紙という手段を介してかたちとなる以上、それは半ばそうであるにすぎない。しかしかつては、いわゆる口承伝統を伝える人物の声として、あるいは石に刻まれた文字として、かたちをなしていたものが、今日では、近い将来電子ブックによって、同じ液晶ディスプレイ上で、小咄集も『神曲』も読める日がくるかもしれないと議論が行われているのだ。あらかじめ早々に断っておかなければならないのは、わたしには、この場で、電子ブックをめぐる是非について論じるつもりはないということだ。もちろんわたしは、小説や詩は紙の本で読みたいと考える人種に属している、ページの折り目や量感まで記憶しているけれど、巷間つたえられるところによると、これまで一冊も本を読んだことがなかったのに、電子ブックのおかげで、はじめて『ドン・キホーテ』に接する機会を得て堪能したハッカーとよばれるデジタル世代なるものが存在するらしい。かれらの知力にはたいした収穫であろうし、視力の点では相当な損害であろう。かりに将来、こうした世代が電子ブックと良好な（精神的かつ肉体的）関係を築けるようになっても、『ドン・キホーテ』の力は変わることあるまい。

文学というこの非物質的な財産は、果たして何の役に立つとい

うのか？ その答えは、すでに述べたとおり、これが無償で消費される財産であり、それゆえ何の役にも立たないのだ、というだけで充分だろう。だが文学のもたらす快楽は無形のものであるという考え方は、文学をジョギングやクロスワードパズルの練習に矮小化しかねない——肉体の健康であれ、語彙の増進であれ、どちらも何かには役立つものだ。だから、わたしが言いたいのは、わたしたちの私生活や社会生活のために文学があらためて担うべき一連の機能についてなのだ。

文学は絶えずことばを鍛錬する

文学はなにより集団の財産であることばを鍛える。ことばは、みずから望むところに赴くのであり、その歩みは、政界であれ学術界であれ、いかなる上からの命令も止めることはできないし、いくら最良の選択だと主張したところで、そちらの状況にむかわせることはできない。ファシズム体制は無理矢理、「バー」を「酒屋」に、「カクテル」を「雄鶏の尾」に、「ゴール」を「得点」に、「タクシー」を「公共自動車」に言い換えさせようとしたけれど、ことばがそれを正しいと認めなかった。やがて、たとえば「シヨフェール（ドライヴァー）」ではなく「アウティスタ（運転手）」と言い換えることが、語彙の気味悪さや受け入れがたい時代錯誤をあらわしていると暗示したうえで、ようやく認めただのである。おそらくはイタリア語にとつて未知の音を避けようとしたのだろう。いったん「タクシー」という語彙を残したあとで、徐々に、すくなくとも口語においては、「タッシ（Tassi）」に変えていった。

ことばは、みずから望むところに赴くが、文学の示唆には敏感

である。ダンテがいなければ、統一されたイタリア語は存在しなかっただろう。ダンテが『俗語詩論』においてイタリアのさまざまな方言を分析し弾劾し、新たに高貴な俗語を形成することを提案したとき、その尊大なふるまいに与する人間など誰ひとりいなかっただろうが、それでも『神曲』によってダンテは勝利をおさめた。事実、万人が話すことばとなるまでにダンテの俗語は数世紀を費やしたが、それが実現したのは、文学を信ずる人びとが、ダンテを手本とし、それが感化を受けつづけたからだ。この手本がなければ、たぶん政治的統一の理念さえ生まれなかっただろう。だからこそ『北部同盟党首ウンベルト』ボッシは、高貴なる俗語を口にしないのかもしれない。

二十年におよぶ運命の峠を越え、不朽のさだめと逃れがたい出来事を経て、たしかに敵には鉄が入れられはしたものの、結局、その痕跡は現代のイタリア語に何ひとつ残っていない。残っているとすれば、せいぜいが、当時の未来派の文章特有のおよそ我慢ならない大胆さぐらいなものだ。だからテレビを介して普及した今日の平均的イタリア語を嘆くことには、その平均的イタリア語なるもの、もつとも高貴な私たちは、マンゾーニからズヴェーロヴォもしくはモラヴィアへとつづく平明で見事な散文があったからこそ注目されるようになったのだということを思い出してもらえばいい。

文学は、ことばの形成に寄与することで、そのアイデンティティと共同体を創りだすものだ。最初にダンテについてふれたが、ホメロス抜きギリシャ文明について、ルターによる聖書翻訳なしのドイツのアイデンティティについて、プーシキンのいいロシア語について、国造りの叙事詩なしのインド文明について

て、いったいどんなものになるか考えてみるという。

だが文学の実践はわたしたち個人のことばをも鍛えつづけるものだ。今日、電子メールや携帯電話の「愛してる」とつたえるために記号ひとつですむようなメッセージによって広まりつつある「新電子言語」の誕生を嘆かわしく思うひとが少なくない。だがこうした新たな速記記号でメッセージを送る若者たち自身の一部は、少なくとも、巨大書店という新たな書物の殿堂に詰めかけて、購入しないまでも、ばらばら立ち読みするだけで、かれらの相父母は言うに及ばず、両親には思いもかけなかった教養あふれる洗練された文学的文体にふれている若者たちと重なり合うのだということをおぼえてはならない。

たしかに言えることは、こうした若者たちは、先行世代の読者たちと比べれば多数派だが、地球上の六十億人からすれば少数派であるということだ。そして食料や医薬品に事欠く無数の人びとに文学が心の平穏をもたらしようと考えるほど空想家でもないということだ。だがひとつ、注意を促しておきたいことがある。闇雲に徒党を組んで、陸橋に投石したり、幼い女の子に火をかけたりにして人殺しをする悪質な連中だって、どんな場合であれ、連中がそんなふうになったのは、けっしてコンピュータの「新言語（ニュースピーク）」のせいでは（ましてやコンピュータにアクセスしたせいで）墮落したからではないということだ。そうではなくて、書物の世界から除け者にされたままで、本来なら教育や議論を通してふれるはずの、価値観に対する自分なりの反響や書物への還元と無縁なままきたからだということだ。

ひとは文学作品を読むことで、解釈の自由における誠実さと尊敬の鍛錬を余儀なくされる

文学作品とは、人間の抑えがたい衝動の命じるままに読むことができる思いのままになるものだという、現代特有の批評の側からのあやうい嘆きを耳にする。それは間違っている。文学作品は解釈の自由へと誘うものだが、それは文学作品が多様な読みのレベルに拠った議論を提起し、言語や生活に関する曖昧さに直面させるからだ。しかし世代によって文学作品の読み方が異なるのであれば、その戯れをつづげるためには、かつてわたしが「テキストの意図」とよんだものにたいする深い敬意に突き動かされる必要がある。

見方によれば、世界は、たったひとつの読解しか許さない一冊の「閉じた書物」に思える。地球の引力を支配する法則が存在し、その正否は問われないのに対し、書物の宇宙は開かれた世界と映る。ところが賢明さを保ちながら小説作品に近づいて、その小説についてなにか言おうと思えば、世界について口にできることと比較することになる。世界についてなら、万有引力の法則はニュートンが唱えたとか、ナポレオンがセント・エレン島で一八二一年五月五日で死んだのは事実だとか、と言うことができる。だが、いつの日か、科学によって宇宙には別の大法則が存在すると告げられたり、資料の新発見によって、ナポレオンは島から逃亡を試みて信奉者の仕立てた船上で死んだことが証明されたら、歴史家に告げられることがあるかもしれない。そのときには、開かれた精神の持ち主であれば、信念をあらためる用意はいつでもあるはずだ。しかし書物の世界と比べると、たとえばハシャック・ホームズは独身だったのと、ハ赤ずきんちゃんはオオ

カミに喰われたけれど狩人に助け出されたVとか、ハアンナ・カ
レーニナは自殺するVとかといった出来事は、永遠の真実であ
り、何びとによっても覆されることがない。イエスが神の子であ
ることを否定する者もいれば、その歴史的存在すらあやしいと言
う者もいる一方で、イエスこそ唯一の道であり真理であり生であ
ると主張する者も、いまだメシアの到来を信じる者もいて、そう
したことに思いを巡らすとき、わたしたちは敬意をもって、その
さまざま意見に接するものだ。けれどハムレットはオフエー
リアと結婚したVとか、ハスパーマンはクラーク・ケントでは
ないVとか、と断言する者がいても、敬意を払う者などいはいしな
い。

文学テクストは、けつして疑いを差しはさむ余地のないことを
明白に告げるばかりでなく、この世界と異なり、至高の権威を
もつて、テクストにおける重要なことと、自由な解釈の手がかり
としてはならないことをしめしてくれる。

『赤と黒』の第三章の最後、ジュリアン・ソレルは教会に赴
きレーナル夫人を狙撃する。スタンダールはジュリアンの腕が震
えている様子を観察したのち、かれは一撃で仕留めることができ
ず、二発目を放ち、ようやく夫人が倒れたのだと告げる。このと
きわたしたちは、その震える腕と、一発目が外れたという事実と
から、ジュリアンが教会に行つたのは殺意を固めてのことであ
り、闇雲に衝動に駆られてのことではなかったのだと想像するわ
けだ。この解釈に異を唱えるとするれば、ジュリアンには当初から
殺意があったが尻込みしていたというものになるだろうか。テク
スト全体の譜面はこの解釈双方を許容している。

一発目の銃弾はどこへいったのかと自問するむきもあるかもし

れない。忠実なスタンダリアンにとつては興味を惹かれる設問で
ある。ちょうどジョイス信奉者がダブリンまで出かけていって、
ブルームがレモン型の石鹸を買った薬局を探し歩く（そしてこの
種の巡礼者たちを満足させるべく、ともかくも実在する件の薬局
は、同種の新型石鹸をつくることにした）のと同様、この地上に
ヴェリエールと教会を探し当て、件の銃弾があけた穴をみつけれ
べく、円柱を一本一本調べてまわるスタンダール信奉者たちのす
がたは想像に難くない。これなら、ファン気質の生んだかなり愉
快な逸話だと言えるだろう。だが、仮にだれか批評家が件の失わ
れた銃弾の行方を根拠に、小説解釈全体を組み立てようとしたら
どうだろうか。最近の様子をみていると、あながちありえない話
ではない。なにしろポーの『盗まれた手紙』の読解を、暖炉と手
紙の位置関係だけから全面的に展開した人物がいるくらいだ。だ
がポーが明らかに手紙の位置にこだわったとすれば、スタンダー
ルは、件の銃弾が行方不明である以上、それは虚構全体の埒外に
置かれていると告げているのだ。スタンダールのテクストに忠実
であろうとするなら、件の銃弾は決定的に見失われたのあつて、
その行方は物語のなかでは不明なままなのだ。ところが『アルマ
ンス』においては、主人公の性的不能について語られていないた
めに、読者はこの物語が語ろうとしない事柄を躍起になって補お
うとするし、『いいなづけ』にある「その不幸な女が答えた」と
いう一文は、ジェルトルーデがどこまでエジディオにたいする自
分の罪を悔いているのかを告げないままだが、読者の心に芽生え
たさまざまな仮説が霧のかなたから射す後光よろしく、このなん
とも慎み深い省略の手口を魅力あるくだりにするのに一役買うこ
とになる。

『三銃士』の冒頭では、ダルタニアンが馬齢十四を数える馬にのってメウンにたどりついたのは、一六二五年四月の第一月曜日であったと記されている。もし優秀なプログラムがコンピュータにのっているなら、瞬時にして件の月曜日が四月七日であったと特定できる。デユマ信奉者にとっては堪えられない、雑学クイズゲーム *trivia games* だ。だがこのデータに基づいて、この小説に關する崇高な解釈がなにか導きだせるだろうか？ 小説の譜面が日付を明かしていない以上、そうは言い難い。小説のなかでは、ダルタニアンの到着が月曜日であったということさえ明らかではない。明らかなのは、それが四月であったということだけだ（思いついてほしい、自分の見事な革帯には、前面にだけ刺繍がほどこしてあるという事実を隠すために、パトスが季節はずれのとくも深紅の長いマントをまとっていたことを——おかげで近衛兵ともあろう者が風邪を引いたふりまでしなければならなかったことを）。

こうしたことなら誰の目にも自明に映るわけだが、その（往々にして忘れられがちな）明証性が告げているのは、文学の世界とは、疑問を差しさむ余地のない前提がいくつか存在するのだという信頼感をもたらすものであり、それゆえ想像力のなかで望むかぎりは真実のモデルを提供してくれるということだ。この文字の上での真実が認識論的真理とよばれるものに反映することになる。だから、たとえばダルタニアンはポルモスに対する同性愛的情熱に囚われているのは何故かとか、インノミナートが悪の道に走ったのはエディプス・コンプレックスのなせる業だとか、モンツアの尼僧は、現代の政治家のなかには思いつきそうな輩がいる

が、コミュニティズムにかぶれて墮落したとか、パニユルジュの所業は生まれつつあった資本主義への憎悪ゆえだとか、と吹聴する人物に対しては、きまつてこう応えればよいだろう。そうした言及があるとき、テクストのなかには、そんな解釈学的逸脱に溺れてもかまわないという断言も示唆も抑えさえも、いっさい見あたらない。文学の世界は、読者の側が現実感覚をそなえているか、幻覚の虜と化しているかを見定める試験となる宇宙なのだ。

登場人物たちは移住する

文学上の人物について、その身に起きる事柄がテクストに記録されているかぎりは、その実在を確認することができるから、テクストは譜面のようなものだということになる。アンナ・カレニナがみずから命を絶つのが真実であるのは、ベートーヴェンの第五交響曲がハ短調で（第六番のようにへ長調ではなく）「ソ、ソ、ソ、ミー」と始まることが真実であるのと同じなのだ。物語の登場人物たちは、運に恵まれさえすれば、テクストからテクストへと移住する。だから移住しない人物たちは、幸運な兄弟たちと存在論的に異なるから移住しないのではなく、たんに運に恵まれないせいで、一顧だにされなくなっているにすぎない。

テクストからテクストへ移住する（しかも書物から映画やパレーへ、あるいは口承伝統から書物へと舞台を変えながらも適応することによって）——それは神話の人物たちも、俗世の物語の人物たちもおなじである。ユリシーズからパルシファル、アリスからピノッキオ、ダルタニアンにいたるまで。さてそうした人物たちを話題にするとき、わたしたちは、精確な譜面を念頭に置いていたのだろうか？ 赤ずきんちゃんを例に考えてみよう。二

枚のよく知られた譜面がある。ペローのものどグリム兄弟のものだ。二枚ともひろく深く浸透している。前者では少女が狼に喰われたところで話が終わるため、不用心なふるまいがもたらす危険にたいする道徳論的反省をうながす。後者では狩人がやってきて狼を殺し、少女と祖母の命を救うというハッピーエンドになっている。

そこで、母親が子どもたちにこのおとぎ話を話して聞かせているとき、狼が赤ずきんちゃんを喰らうところで口を噤んだとしよ。子どもたちは不平を言つて、赤ずきんちゃんが生き返る、あのへほんとうの話をしよとせがむだろう。そんなとき母親がいくら厳格な文献学者を装つても何の甲斐もあるまい。子どもたちは、ほんとうに赤ずきんちゃんが生き返るのがへほんとうの話をしよ、その物語がペロー版よりもグリム版に近いことを知っているからだ。もつともその物語はグリムの譜面と一致するわけではない。一連のこまかな事実が抜け落ちていくからだ。この点に関しては、たとえば赤ずきんちゃんが祖母のところに行くとき持つていくおみやげなど、ペローとグリムにも食い違いがみられる。そうした差異に、子どもたちがかなり鷹揚に折り合いをつけるのは、なんとも図式的なひとりの人物が、伝統のなかを漂ううちに、多くの場合、口承の、さまざまな譜面に組み込まれてしまうものだ。と多寡をくくっているからだ。

こうして赤ずきんちゃんも、ダルタニアンも、ユリシイズやボヴァリー夫人も、元の譜面の外で生きる個々の人間になり、かれらがほんとうに存在するという確信については、原型となる譜面を読んだことのない者でも躊躇なく断言するようになる。わたしも、『オイディプス王』を読む前から、オイディプスがイアカス

テと結婚することを知っていた。ふたりがどれほど彷徨ったところで、その譜面は実証不可能なものだ。ボヴァリー夫人はシャルルと和解して幸せに暮らし、満足しているとでも言おうものなら、健全な良識ある人びとからは、まるでエンマという人物に誰もが共感しているみたいなのに、不快な顔をされるだろう。

こんなふうに彷徨う人物たちに居場所はあるのだろうか？ それはわたしたちの存在論をめぐる書物次第だ。それが堅固な起源をそなえるものか、エトルスクの言語と三位一体に関するふたつの考え方をふくんでいるかどうかにかかっている。つまり聖霊は父と子から生まれとするローマの考え方と、聖霊は父からのみ生まれるとするビザンティンの考え方と、その双方をふくむかどうかである。だがビザンティンにしたところで、その区分は相当不分明なもので、大きさの異なる実体を受け入れている。コンスタンティノーブルの総大司教も（子の問題をめぐってなら、いつでも教皇と掴み合いの喧嘩をする用意があるくせに）、ほんとうにシャーロック・ホームズがベーカー街に住んでいて、クラーク・ケントがスーパーマンと同一人物であるという点については、教皇と（少なくともそうあつてほしいが）意見の一致をみるだろうから。

もつとも、無数の小説や叙事詩のなかに——これはわたしがいづきで捏造した例だが——アストゥルバルはコリンナを殺したとか、テオフラストはテオドリンダを愛しているとか書かれていたとしても、その実在を確かめられるなどと考える者はいない。それは、この人物たちが運に恵まれないか、悪い星のもとに生まれたせいだ、移住することもなく、集団の記憶の一員にならなかったからだ。この地上の世界では、ハムレットはオフエーリア

と結婚しないということのほうが、テオフラストがテオドリンドと結婚しなかったことよりも真実であるのは何故なのだろうか？ この地球上のどこにハムレットとオフェーリアが暮らす土地はあるのだろうか？

ふたりがともかくも集団からみてほんとうに存在すると考えられるようになったのは、歳月と世紀を重ねるうちに、共同体がふたりに情熱をそそぐようになったからだ。わたしたちは白昼夢や夢うつつの状態でまざまざと見ることでできる幻想に、それぞれが情熱をそそぐ。現実には、愛する人物の死を思っただ感動することもあれば、愛を交わしている最中に、死を思い描いたせいで、意のままにならずに悩むこともある。同じように、我が身を重ね合わせ投影することで、エンマ・ボヴァリーの運命に感動することもあれば、何世代にもわたって実際に起きたように、ウエルテルやヤコポ・オルティスの不運に導かれるようにして自分も命を絶つことだってあるのだ。しかし、その死を想像した人物はほんとうに死んだのかと訊ねられたら、そんなことはない、自分ひとりだけの空想ですから、と応えるだろう。けれどウエルテルはほんとうに自殺したのかと訊ねられたら、そうだと答えるだろう。その想像はもはや個人のものでなく、読者共同体全体が認める文化的現実なのだ。愛する女性の死を想像しただけで（それが想像力の出産であると重々承知のうえで）自殺する男がいれば、狂っているとみなされるだろうが、虚構の人物の話であると重々承知しているにもかかわらず、ウエルテルの自殺が原因でみずからも命を絶つた者については、ともかくもなんとか正当化されてしまう。

わたしたちは、登場人物たちの居場所をこの宇宙のどこかに、

何としてもみつけないければならない。そうすることで、かれらをわたしたち自身の人生のモデルとして、どうふるまうべきかが分かるからだ。だから、誰それはエディプス・コンプレックスをかかえているとか、ガルガンチュエアなみの食欲だとか、ドン・キホーテみたいな行動だとか、オセロみたいに嫉妬深く、ハムレットみたいに疑り深いか、癒しがたいドン・ファンだとか、『いいなづけ』の司祭ドン・アッボンディオのもとで働く賄い女【ペルペトウアみたいだとか、と聞かされれば、その意図するところが実によく分かるのだ。しかも文学の場合、こうしたことは登場人物だけでなく、状況や事物についても生じる。

部屋の中を歩きまわりながらミケランジェロについて話す女たち、岸壁に突き刺さる尖った瓶のかけらたち、まばゆい陽の光、悪趣味きわまりない素敵なものたち、黒い粉塵のなかで垣間見えた恐怖、生け垣、清らかに澄んだ水のためたさ、誇るべき食事——これがすべて執拗な隠喩となつて、どんな瞬間でも、絶えずわたしたちに、自分は何者なのか、何を望んでいるのか、どこへ行くのか、あるいは、「ぼくらでないこととぼくらがのぞまないこと」について問いかけてくるのは何故なのだろうか？

こうしたものがまるごと文学の実体として、わたしたちのなかにあるのだ。明確な起源やピタゴラスの定理のように永遠が刻まれているわけでは（たぶん）ないけれど、いったん文学によって創りだされ、わたしたちのそそぐ情熱によって育まれたからには、実体として存在するのであり、それと決着をつけるのがわたしたちの義務となる。存在論的・形而上学的議論を避けるために、それらの実体は、文化的習性や社会的装置として存在すると言つてもかまわない。だが近親相姦という普遍的な禁忌もまた、

文化的習性や理念、装置であることに変わりはない。ただ、この禁忌には人間社会の運命を左右する力があつた。

ハイパーテキストと終わりある物語

しかし今日では、文学上の登場人物さえも、うつろいやすく儂い存在となり、その運命を否定する余地などなかった堅固さを失いかねない状況にあると言うむきもある。すでにハイパーテキストの時代は到来しているのだ。電子的ハイパーテキストは、絡まり合った(百科全書全体でもシエークスピアの全作品でもよい)テキストを、そこに含まれた情報を必ずしも漏れなく拾い集めなくとも、毛糸玉に通した鉄の縫い針さながらに貫通しながら旅することを可能にする。ハイパーテキストのおかげで、自由な創作的書法の実践が生まれた。インターネットをのぞけば、さまざまな物語を集団で書くことのできるプログラムがいろいろあつて、際限なく話の展開を修正しながら物語に参加することができる。そうしたことが仮想の仲間たちと創作しているテキストについてできるのであれば、既存の文学テキストにも応用したつてかまわないだろう。そのプログラムを手に入れて、もしかしたら何千年もの間わたしたちに取り憑いてきた、偉大な物語のあれこれを書き換えたつてかまわないのだ。

考えてみてほしい。かつて『戦争と平和』を熱心に読みながら、果たしてナターシャはアナトリーの甘い言葉にほだされてしまふのか、あの素敵なアンドレイ王子はほんとうに死んでしまったのか、ピエールにはナポレオンを狙撃する勇気があるだろうか、と幾度も自分に問いかけたことを。いまや、そのあなたたちのトルストイを自分の手で書き直すことができるのだ。アンドレイに幸

福な人生をいつまでも送らせることも、ピエールをヨーロッパの解放者に仕立て上げること。それどころか、エンマ・ボヴァリーをあわれなシャルルと和解させて、心穏やかで幸せな母親にすることだつてできる。だから、森に入った赤ずきんちゃんが途中でピノッキオに出会うのか、それとも継母に連れ去られてシンデレラと名付けられ、スカレット・オハラに仕えさせられるのか、あるいは森でウラジミール・プロップという魔法使いに出会つて、魔法の指輪をもらい、その力で、宇宙のすべてを見渡せる点であるアレフを発見することになるのか、それを決めるのはあなたたちなのだ。プーチン政権によつて鉄道の軌道が狭軌に変わったせいで、鉄道は潜水艦なみの運行となり、おかげで列車で轢死せずにすんだアンナ・カレーニナと出会わせることも、さらにはアリスの鏡のむこう側、はるか彼方のところで、バベルの図書館に『戦争と平和』を忘れずに返すようにと記憶の人フネスに念を押しているホルヘ・ルイス・ボルヘスと出会わせることだつて……

こうなつてはいけないうだろうか？ そんなことはない。それはすでに文学がやつてきたことなのだから。ハイパーテキスト以前に、マラルメの△書物△の構想があり、シュルレアリストたちの△死体△が、クノーの△百兆の詩篇△があり、第二期アヴァンギャルドの△動く書物△があつたではないか。だがジャム・セツションが実践可能で、毎晩なにか主題を変えることのできるからといって、毎晩さまつて同じように終わる『作品第三十五番 変口短調ソナタ』を演奏会場に聴きにいくのが億劫になつたり、嫌気がさすわけではない。

ハイパーテキストのメカニズムと戯れることによつて、二種類

の抑圧を逃れることができると言ったひとがいる。それは、相互の服従関係と、書き手と読み手という社会的区分による処罰であるというのだ。わたしからみると馬鹿げた物言いにはすぎないが、ハイパーテキストと創作遊戯をしながら、物語を書き換えて新しい物語をつぎつぎ創りだしてゆくことは、たしかに学校で練習するにはうってつけの、興味をそそる行為だし、ジャム・セツションによく似た新たな書法の形態といえるかもしれない。すばらしいことだろうし、教育的にみても、既存の物語を書き換える練習を積むことは、シヨパンの曲をマンドリン用に編曲することによって、音楽的才能を研ぎすまし、変口短調ソナタにはピアノの鍵盤が不可欠である理由を理解する助けになると同じことなのかもしれない。視覚的才能や形態の把握にも役立つかもしれない。『処女懐胎』と『アヴィニヨンの貴婦人』、それに最新のポケモンの話をバラバラにつなぎ合わせてコラーージュを試みればよいのだ。もつとも、それだって過去に偉大な芸術家たちがやったことにちがいはない。

だがこうした遊戯は、文学本来の教育的機能に代わるものではない。教育的機能とは、善悪をめぐる道徳観の伝達や美的感覚の形成に還元されるものではないからだ。

ユーリ・ロトマンは『文化と発見』のなかで、チエーホフの有名なハ勧告Vを例に、短篇や劇作品の冒頭に、壁に銃が掛かっていることと記されていれば、結末の直前で銃が発砲されるはずであることを、あらためて検証している。ロトマンは言外に、ほんとうに問題なのは件の銃が実際に発砲されるか否かではないのだと告げている。発砲の有無を知らないからこそ、物語の筋の意味がふくらむことになる。なにか短篇を読むことは、いわば緊張や発作

に襲われることを意味する。結末で銃が発射されたか否かをたしかめることは、ひとつの情報価値にとどまるものではない。事態の展開は、どんな場合でも、なんらかのかたちで読者の期待を越えたところにあるという発見なのだ。そうして生じる欲求不満を読者は受け入れて、不満を抱えながら運命のおぞましさを味わわねばならない。もし登場人物の運命を決めることができるとしたら、旅行会社のカウンターに行つて、「例のクジラはどこに行けば見られるの？ サモア諸島？ それともアリューシャン列島？ いつ？ あのひとが殺そうとしているの？ それとも逃がしてあげるのかしら？」と言つても同じことだろう。『モビー・ディック』がほんとうに教えてくれるのは、クジラは思いのままに行き先を決めるということだ。

ユゴーの『レ・ミゼラブル』にあるワテテローの戦闘描写を考えてみよう。ファブリスの眼を通して戦闘を描くことで、渦中にある人間には何が起きているか判らないとしたスタンダールとはちがって、ユゴーは神の目によって、高みからながめることで、戦闘を描いている。それゆえ、モン・サン・ジャン台地の尾根のむこうには絶壁があると、もしナポレオンが知っていたら（案内役が知らせなかったのだけれど）、ミローの甲冑騎兵隊がイギリス軍に壊滅させられることはなかったことも分かっているのだ。

ハイパーテキストの構造を使えば、ワテテローの戦いを書き直すこともできる。ブルシェールのドイツ軍ではなく、グルーシーのフランス軍を駆けつけさせてみてもいい。そんなことのできるハ戦争ゲームVがいろいろあって、たのしいものだ。だがユゴーによる件の描写の偉大な悲劇性は（わたしたちの期待とは別

に)、事態が事実どおりに進行する点にある。『戦争と平和』のすばらしさは、アンドレイ王子の苦悶が、いくら読者にとつて悲しかろうと、その死によつて終わることにある。偉大な悲劇作品をあれこれ読み返すたびに悲しい衝撃を味わうのは、過酷な運命から逃れられるにもかかわらず、主人公たちが弱さや盲目ゆえに訳も分からないまま突き進み、みずから掘った奈落の底へと墜落してゆくからだ。事実ユゴーは、ワーテルローでナポレオンがすんでのところまで逃した絶好の機会を描いたあとで、こう記している。「この戦いにナポレオンが勝利を収めることはありえただろうか? ありえない。何故か? 敗因はウエリントン將軍か? ブルシエール將軍か? いや、神のなし給うわざだ」

あらゆる偉大な物語が同じことを言っている(「神」が「運命」と、あるいは「人生の苛酷な定め」と置き換えられていることはあるかもしれない)。これこそが「修正の利かない」物語の果たす機能なのだ。運命を変えたいとわたしたちが願うたびに、変えることはかなわないと論じてくれることだ。そうすることで、どんな物語が語られようと、それはわたしたちの物語となる。だからこそ、わたしたちは物語を読み愛するのだ。物語の厳しい「抑圧的」な教えが、わたしたちには必要なのだ。ハイパーテクストによる物語は、自由と創造性について教えてくれるかもしれない。それはたしかにすばらしいが、全面的にそうだと言えるわけではない。△既存の物語なら、死についても教えてくれるからだ。

この運命と死についての教えこそ、文学の主要な機能のひとつである。わたしは信じている。おそらくほかにもあるにはちがいないが、目下のところ、わたしには思いつかない。

【訳者解題】

ここに訳出したのは、Umberto Eco, SU ALCUNE FUNZIONI DELLA LETTERATURAと題された講演原稿である。

昨年九月十日、マントヴァ文学祭において読み上げられたものだが、いまだ活字にはなっていない。件の講演直後、ポローニャで本人に会った際、当研究所の雑誌への掲載を依頼したところ、当分発表を見合わせてほしいという出版社の意向をふりきるかたちで、当方に寄せてくれた経緯のある原稿である。

一読してわかるように、ここでエーコは、文学の果たすべき機能を固く信じつつ、(とりわけ若者たちの) 未来にむけてメッセージを発信している。

文学の機能といっても、この「非物質的」(つまり、無形の) 財産が寄与する教育的機能に集中して議論は展開している。それはちよとど、一九九二―一九三年度にハーヴァード大学ノートン・レクチャーズの一環として行われた六回の連続講義の内容と表裏一体の関係にある。翌九四年、『小説の森散策』と名付けられることになる講義のなかでは、もっぱら「読者の育成」に主眼がおかれ、みずから提起した記号論的仮説モデルを下敷きに、小説の快楽を説きながら、実践的な読解の訓練を施していた。このマントヴァの講演では、実践性は影を潜め、むしろ二十一世紀を見据えた大きな展望のもとに、理念性を前面に押しだそうとしているようだ。△虚構に現実が学ぶというエーコの姿勢にももちろん変化はない。

しかしアメリカでは触れられていなかった電子メディアと文学の関係が、この講演では大きな比重を占めている。いわゆるハイ

パーテキストの出現が文学の機能に変化を及ぼすか否かという問題である。この問題については、すでに「書物の未来」と題された論考が英語で発表され、『本とコンピュータ』誌上に拙訳も掲載されたので、ご覧になった読者もいるだろう。いささか乱暴に言えば、エーコの立場は、電子メディアの可能性は認めながらも、紙による書物として提供される文学の機能を肩代わりするものではないというものだ。

エーコが古書蒐集家としても名高いことを思えば、書物にたいする愛着には並はずれたものがあつて当然だが、この講演でのエーコは、そうした情緒を極力排して、冷静に文学のもつ教育的機能について、論ずように語っている。みずからが文学テキストの一部であるかのようにふるまっていると言つてもよい。

だがけつして懇切丁寧に教えてくれるわけではない。それは文学テキスト自体が本来不親切なものだからにほかならない。だから、講演中に例に挙げられる作品名や登場人物名について判らないとしても、恨むべきは読者であるわたしたち自身ということになる。

エーコのことばを借りるなら、そんな「抑圧的」な状況に我が身を駆り立てるのも、文学の教育的機能が生んだ成果だということになるかもしれない。

さて昨年末に刊行された長編歴史小説『バウドリノー』は、果たしてテキストとして、小説家エーコの目論見どおり、教育的機能をそなえているだろうか。

